

芸北地方の食生活の変遷

高度経済成長期とその前後

Changes in People's Eating Habits in Geihoku (Northwestern Hiroshima Prefecture) : Before and after Japan's High Economic Growth Period

新谷尚紀

SHINTANI Takanori

- ① 高度経済成長期 (1955 - 1973) 以降の食生活
- ② 昭和30年代以前の芸北地方の食生活
- ③ 芸北地方の高度経済成長期とそれ以降の食生活
- ④ 論点

【論文要旨】

昭和 30 年代以前の芸北地方の山間部での食生活では、日常食はすべて米はほんの一部だけしか入っていない麦飯や大根飯やジョウボ飯などであった。米を如何に食い延ばすかが主婦の力量とされていた。食事の回数は朝昼晩と 3 食が基本であったがオチャという軽食があり、農閑期では 4 食、農繁期には 5 食から 6 食であった。ふだんの米を節約する質素な食事に対して、ハレの食の正月の大晦日の「年取り」には白いご飯を食べ、三が日は白いもちの雑煮のほかは三食とも白飯を食べた。正月の三が日を過ぎると 4 日の朝からは白飯や白餅ではなくよもぎもちやてんこもちになり、「正月や二日三日はよけれども四日の朝のてんこ悲しや」という俗謡も伝えられていた。米作りの農村なのになぜ米が極力節約されたのか、それは米が唯一の換金価値のある生産物であり基本的な衣食住の維持とその他生活上の便益品を得るために米が唯一の価値をもつものだったからである。歴史的にも長く納税品の中心であり、それが農村の生活を圧迫し続けてきた。その「米だいじ」という生活知の背景には日常食の中にあらゆる自然の恵みを食材として活用してきた知恵と技術の蓄積があった。高度経済成長期 (1955 - 73) を経る中で起こった列島規模の食生活変化は旧来の日本各地の地域差や地域性を覆い尽くすほどのものであった。ショッピングセンターの普及や高速道路網の整備などにより、この地方の食生活も全国共通の都市型化が進んだ。しかし、注目されるのは昭和 30 年代以前までこの地方で親しまれていた食材や食品に対する嗜好の継続性であり、山菜やきのこ、おはぎやしばもち、浜田からのわかめやまんさくなど古くから親しまれてきた食品が現在も伝えられ賞味されている。食生活の全国的な画一化の中にあっても伝統的であった地域の食材や食品はかたちを変えながらも一部で伝承されるという点、つまり食生活も食材と食習とが地域的に「変遷と伝承」の中にあるということが注目される。

【キーワード】 日常食と晴れ食、米作りの中の米不足、米の交換価値、食生活の画一化、嗜好の継続性